

II 教 育

II 教 育

1. <観点>教育目的（目標）と特徴

（1）目的（目標）

北海道大学獣医学部では、地球上の全ての動物生命に責任を負う自然科学としての獣医学を背景に、動物の病気の診断・治療・予防にとどまらず、安全な動物性食品の供給、医薬品の開発や生物科学への貢献、野生動物の保護・管理と人獣共通感染症の制圧など、獣医学に対する社会の多様な要請に応えうる獣医師を養成することを教育の理念としている。

（2）特徴

平成 22 年度入学者は、専門科目において獣医学の基礎・応用及び臨床にわたる高度の知識と技術を教授する目的で、4つの学科目、生物医科学、応用獣医学、病因病態学及び臨床獣医学と全般にわたる共通科目を学んでいる。

平成 23 年度入学者から総合入試を開始し、1 年間は文系、理系それぞれの統一カリキュラムで教育を行っている。

平成 24 年度入学者から北海道大学と帯広畜産大学は、国際的水準の獣医学教育を実施するため、共同獣医学課程を編成し、北海道というフィールドを生かした実践的かつ先進的な獣医学教育を行っている。

本学部共同獣医学課程では、下記の到達目標を目指して学修する点に特徴を持つ。

- 1) 獣医師としての任務を遂行するための論理性と倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけることができる。
- 2) 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技能を持つことができる。
- 3) 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技能を持つことができる。
- 4) 最先端の生命科学研究に触れ、生命科学理論の新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を持つことができる。

2. <観点>教育の実施体制

（1）教員組織の編成

（観点に係る状況）

平成 22 年度～平成 25 年度における教員組織の編成については「獣医学研究科自己点検・評価報告書、II 教育、1. 教育の実施体制」で説明した。獣医学部・共同獣医学課程における教育は、獣医学研究科教員が兼務・担当する（I 総論、3. 組織体制）。なお、共同獣医学課程を担当する北大と帯畜大の平成 26 年度における教員数、構成を資料 1 に示す。

資料1 北大・帯畜大共同獣医学課程の教員構成

職名	北海道大学	帯広畜産大学	合計
教授	17 (1)	24 (0)	41 (1)
准教授	16 (0)	10 (1)	26 (1)
講師	5 (1)	3 (0)	8 (1)
助教	26 (12)	12 (0)	38 (12)
合計	64 (14)	49 (1)	113 (15)

- ・ 北大は平成 26 年 12 月 1 日現在，帯畜大は平成 26 年 4 月 1 日現在の在職者数
- ・ () 内の数字は特任教員内数 出典：北海道大学・帯広畜産大学庶務担当データ

(2) 教育の実施体制

(観点に係る状況)

平成 22 年度～平成 23 年度において，北海道大学獣医学部は単独で教育を実施してきた。すなわち，教務委員会で審議し，学部教授会において最終決定する（別添資料 1）。

平成 24 年度以降，北海道大学と帯広畜産大学の共同獣医学課程のカリキュラムに関しては，北海道大学は教務委員会で審議し，学部教授会において最終決定するが，帯広畜産大学は学部教育部会議で審議し，教育研究評議会において最終決定する（別添資料 2）。また，共同獣医学課程に係る教育内容，科目設定，割り振り，講義実習の割合，各年次の時間割などの細かい事項に関しては，共同獣医学課程協議会（別添資料 3）において審議し，それぞれの大学の決定プロセスを経て確定することが協定書（別添資料 4）に定められている。また北海道大学の場合は，最終的な科目名及び単位は北海道大学の全学教務委員会・教育研究評議会に附議決定され，大学便覧に掲載される。

北海道大学は獣医学教育改革室，帯広畜産大学は国際認証推進室を設置し，European Association of Establishments for Veterinary Education (EAEVE) 認証を目指し，教育体制の強化を実施してきた（別添資料 5）。さらに，北海道大学は国際連携推進室を設置し，アジアの獣医系大学との単位互換を実施してきた。

(3) 教育改革に取り組む体制

(観点に係る状況)

先に述べた獣医学教育改革室は，獣医学教育に関する調査研究を行い，獣医学の基盤教育の充実を図ることを目的として設置された。その業務は，(1) 教育改革に関する情報収集，(2) 教育プログラム及び教育コンテンツの開発，ならびに (3) 国内関係機関との連携による教育プログラムの実施である。

(1) については，EAEVE 認証を目指し，帯広畜産大学国際認証推進室と共に EU 諸国の認証取得状況と認証取得の条件について検討を行っている。(2) については，自学自習を促進するためセルフラーニングシステム，バーチャルスライドシステム，術野映像システムを導入した（別添資料 6）。(3) については，北海道というフィールドを生かし，標津町と協定を結び，野生動物に係る実践的教育等を行っている（別添資料 7）。

国際連携推進室は，大学院と学部における教育・研究における国内外の大学や関係機関との連携，共同事業の円滑化・効率化を目的に平成 23 年度に設置された。国際連携に関する連絡調整，情報の収集・提供，学生・教員の派遣・受入，国内外会議／シンポ

ジウム等開催に関する支援業務を行っている。「博士課程教育リーディングプログラム」の実施、英国エジンバラ大学との定期的学生交流ならびにタイ王国カセサート大学との単位互換を伴う学生交流事業を推進している（別添資料 8, 9）。

【観点ごとの分析】

北海道大学・帯広畜産大学共同獣医学課程を平成 24 年度に設置し、共同教育を開始した。教育組織の規模は、従前の実質 2 倍となった。教育改革室、国際連携推進室の設置を通して機能の強化が進められている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

教育改善のために全国に先駆けて獣医学教育の共同教育課程を設置し、共同教育を開始した。教員の基本的組織を適正に構成しつつ、大学の垣根を越えた組織改革に積極的に取組み、教育改革室及び国際認証推進室を中心に EAEVE 国際認証を取得すべく、教育カリキュラムの改革へと導いており、期待する水準を大きく上回ると判断される。

（改善方策）

特任教員ポストの維持・確保や承継人事ポストの獲得により組織改革・拡充の取組を強化する。国際認証の取得に至るタイムスケジュールを早めるなど、積極的な教育改革の取組を強化する。

3. <観点>学生の受入

（1）アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）

（観点到に係る状況）

【学部理念】

北海道大学獣医学部は、地球上の全ての動物生命に責任を負う自然科学としての獣医学を背景に、動物の病気の診断・治療・予防にとどまらず、安全な動物性食品の供給、医薬品の開発、生物科学への貢献、野生動物の保護・管理と人獣共通感染症の制圧など、獣医学に対する社会の多様な要請に応えうる獣医師を養成することを理念としている。

【教育目標】

本学部は、動物の健康の保持増進、公衆衛生の向上、食の安全及び生命科学の発展に寄与するために、獣医学に関する専門的な知識と技術を教授することにより、豊かな人間性、高い生命倫理観と国際的視野を備えた獣医師及び獣医学に関する創造性を有する研究者を養成する。具体的目標は次のとおりである。

- ① 獣医師としての任務を遂行するための論理性と倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけることができる。
- ② 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越し

た知識・技能を持つことができる。

- ③ 安定的な食料供給，家畜及び畜産物の安全確保，人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技能を持つことができる。
- ④ 最先端の生命科学研究に触れ，生命現象に関する新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を身につけることができる。

【求める学生像】

- ① 動物を愛するとともに，動物を科学的視点から客観的に観察することのできる学生
- ② 生命現象に対して，畏敬の気持ちと科学的な探究心をもつ学生
- ③ 獣医学を通じて社会的，国際的に貢献したいと考える学生

(2) 入学者選抜の実施体制

(観点に係る状況)

獣医学にむけた多様な社会的ニーズに応えるため，幅広い志願者の中から，優秀でかつ，上述の「求める学生像」に合致する学生を選抜している。そのため，複数の異なる選抜手段、即ち一般入試（前期日程，後期日程），帰国子女入試，私費外国人留学生入試を実施している（資料 2）。一般入試前期日程では，大学入試センター試験の成績と本学の学力検査の成績を総合して合格者を決定する。後期日程では，加えて高校の調査書等の審査と面接を実施し，それらを総合して合格者を決定している。

資料 2 平成 22 年度～平成 25 年度における入学者選抜の種類，志願者数，定員，入学者数

年 度	入学志願者数		定 員	入学者数	
				学部別入試	総合入試
平成 22 年度	一般入試（前期）	120	20	20	
	一般入試（後期）	156	20	22	
	帰国子女入試	4	若干名（内数）	0	
	私費外国人入試	0	若干名（内数）	0	
平成 23 年度	一般入試（前期）	103	20	20	
	一般入試（後期）	114	15	14	
	帰国子女入試	2	若干名（内数）	0	
	私費外国人入試	1	若干名（内数）	1	
	総合入試 ¹⁾	2,830	5		5 (1,098) ²⁾
平成 24 年度	一般入試（前期）	115	20	22	
	一般入試（後期）	123	15	15	
	帰国子女入試	2	若干名（内数）	0	
	私費外国人入試	0	若干名（内数）	0	
	総合入試 ¹⁾	2,855	5		5 (1,098) ²⁾
平成 25 年度	一般入試（前期）	105	20	22	
	一般入試（後期）	109	15	15	

	帰国子女入試	3	若干名 (内数)	0	
	私費外国人入試	0	若干名 (内数)	0	
	総合入試 ¹⁾	3,187	5		5 (1,098) ²⁾

¹⁾ 総合入試は、平成 23 年度より開始した。

出典：教務担当データ

²⁾ 総合入試による入学者数のカッコ内数値は、総合入試（理系）合格者数（1 年次）を示す。

（３）入学者選抜方法の工夫 （観点に係る状況）

平成 23 年度以降、大学が実施する総合入試理系合格者の中から、2 年次進級時に最大 5 名の学生を選抜している（資料 2）。総合入試は、理系枠、あるいは文系枠で受験し、入学後に進学する学部を選択できるものであり、学生本人の志望と 1 年次の総合教育部における全学教育の成績により、学部に移行するものである。

（４）入学者数・収容者数 （観点に係る状況）

平成 22 年度～平成 25 年度における収容者数を資料 3 に示す。平成 23 年度から前述の総合入試制度を開始したため、平成 23 年度以降の 1 年次は 5 名少ない。平成 23 年度の 3 年次ならびに平成 25 年度 5 年次を除く年度・学年において、定員が満たされている。また、資料 4 に示す出身高校所在地調査の結果から、獣医学部学生が広く全国各地から志願し、入学していることが分かる。

資料 3 平成 22 年度～平成 25 年度における収容者数

年度	学生数							卒業生数
	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	5 年次	6 年次	合計	
平成 22 年度	42	41	43	49	43	43	261	42
平成 23 年度	35*	45	38	46	44	44	252	44
平成 24 年度	37*	43	42	40	41	44	247	42
平成 25 年度	37*	42	41	41	39	43	243	41

*平成 23 年度以降の 1 年次学生数は 2 年次に獣医学部進学が決定している総合教育部所属学生数を示す。

資料 4 獣医学部学生の出身高校の所在地（総合入試の学生を含む）

出身高校 所在地	入学年度				4 年間 の合計
	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	
北海道	3	3	5	3	14
岩手県	－	2	－	－	2
宮城県	－	－	－	3	3

福島県	1	-	-	2	3
茨城県	2	2	-	3	7
栃木県	-	1	1	-	2
群馬県	1	-	-	1	2
埼玉県	2	-	1	1	4
千葉県	1	1	3	1	6
東京都	5	4	6	2	17
神奈川県	1	2	2	2	7
富山県	-	1	-	-	1
石川県	-	2	-	-	2
福井県	-	-	2	2	4
長野県	-	1	-	-	1
岐阜県	1	-	2	-	3
静岡県	-	2	2	5	9
愛知県	4	2	2	3	11
三重県	-	-	-	1	1
滋賀県	-	-	1	-	1
京都府	1	1	2	2	6
大阪府	5	3	4	1	13
兵庫県	4	2	3	1	10
奈良県	2	2	-	2	6
和歌山県	1	2	1	-	4
広島県	-	1	1	1	3
徳島県	1	-	-	1	2
香川県	2	2	-	-	4
愛媛県	2	1	1	-	4
福岡県	3	1	-	1	5
佐賀県	-	-	1	1	2
熊本県	-	-	1	1	2
宮崎県	-	-	1	1	2
鹿児島県	-	1	-	-	1
沖縄県	-	-	-	1	1
外国（韓国）	-	1	-	-	1
合計	42	40	42	42	166

出典：教務担当データ

（５）平均的な在籍期間

（観点に係る状況）

平成 22 年度～平成 25 年度における平均的な在籍期間を資料 5 に示す。標準修業年限 6.00 年であるところ、この間、6.02～6.16 年で推移している。

資料 5 平成 22 年度～平成 25 年度における学生の在籍期間の分布と平均

在籍期間	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
6 年	41	41	40	39
7 年	1	2	2	2

8年以上	0	1 (11年)	0	0
卒業までの平均年数	6.02年	6.16年	6.05年	6.05年

出典：教務担当データ

（6）社会人学生の受入

（観点に係る状況）

平成22年度～平成25年度では、社会人学生（学士編入）の入学者、ならびに受入の実績はない。

（7）留学生の受入

（観点に係る状況）

平成22年度～平成25年度では、1名の私費外国人留学生（定員内）が入学した。短期留学生としてエジンバラ大学、ボゴール農業大学（インドネシア）から獣医学部独自で4名の学部留学生の受入を行うとともに、大学全体のプログラムである Hokkaido University Short-Term Exchange Program (HUSTEP)により別途4名を受け入れた（資料6）。

資料6 平成22年度～平成25年度における学部留学生の受入実績

年 度	エジンバラ大学	ボゴール農業大学	HUSTEP
平成22年度	-	-	2名（11ヶ月）
平成23年度	-	-	1名（11ヶ月）
平成24年度	2名（2週間）	2名（1ヶ月）	1名（11ヶ月）
平成25年度	-	-	-

出典：教務担当データ

【観点ごとの分析】

アドミッション・ポリシーは、獣医師の責務ならびに社会的ニーズに応える内容である。入学者選抜の実施体制は、多様な入学者を選抜できるよう整備されている。入学者選抜方法の工夫として、総合入試制度を導入したことにより、さらなる多様化が進んだ。総合入試入学者の分析は後述する。平成22年度～平成25年度において、入学者に帰国子女入試の合格者ならびに学士編入合格者が出ていない。入学志願者数はいずれの年度・入試の種類も高いレベルで推移している。平均的な在籍期間をみると、95%を超える学生が標準修業年限である6年で卒業している。帰国子女入試は、いずれも志願者の学力が低く、受入は困難であると判断された。平成23年度において、私費外国人留学生入試で1名が（韓国）が入学した。社会人（編入）学生の受入は、定員に欠員がある場合に限り検討することとしているため、受入は困難であった。

短期受入の留学生については、HUSTEPによる受入の他、エジンバラ大学、ボゴール農業大学からの受け入れ実績がある。また、カセサート大学との単位互換を伴うMOU締結によって、短期留学生の受入が平成26年度から開始され、徐々に拡大しつつある。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

妥当なアドミッション・ポリシーの設定と公開，入学者選抜の多様化が実現されており，留学生受入の協定も整っていることから，期待を大きく上回っていると判断される。

(改善方策)

アドミッション・ポリシーを有効に実現するための改善方策を検討する。総合入試(理系)からの入学者の学業成績や進路などについて経過を追い，この入試の意義について検討する。帰国子女ならびに私費外国人入学者が少ない理由は，志願者が少ないことに加え，志願者の学力が劣ると判断されたためである。大学入試センター試験を課すなどの一定レベルの学力の担保が必要であり，改善策を検討する。共同獣医学課程の入試方策について，抜本的改善策を検討する。

4. <観点>教育内容と方法

(1) 教育課程の編成

1) 教育課程

(観点到に係る状況)

教育課程は全学教育と専門教育に分かれ，獣医学部における卒業に必要な総単位数を資料7に示す。これらは，平成23年度入学者から総合入試を開始したことに伴う変更，ならびに平成24年度から北海道大学獣医学部・帯広畜産大学共同獣医学課程を実施したことに伴う変更である。必修科目は獣医学のコア科目と位置付けし，5年次前期前半までに終了する。アドバンスト科目は獣医師が関わる分野に対応した実学を学ぶためのいわばアラカルト教育であり，共同獣医学課程で新たに設置された。

資料7 卒業に必要な単位数

入学年度	総単位数	全学教育科目/ 一般教養教育 科目	専門科目		
			必修科目	選択科目	アドバンスト科目
平成22年度	197	48	139	10	—
平成23年度	195	46	139	10	—
平成24年度	200	46	136	4	14
平成25年度	200	46	136	4	14

出典：教務担当データ

平成22年度～平成25年度全学教育科目実行教育課程表【獣医学部】を別添資料10に，平成22年度獣医学部専門科目実行教育課程表を別添資料11に，平成23年度獣医

学部実行教育課程表を別添資料 12 に、平成 24 年度～平成 25 年度共同獣医学課程実行教育課程表を別添資料 13 に示す。

総合入試を開始したことに伴い、1 年次で実施していた専門科目（獣医学概論，基礎獣医学演習）を 2 年次に後ろ倒しした。共同獣医学課程を開始したことに伴い、専門科目が系統，臓器，病因，動物種ごとに細分化され，従来 65 科目であったところ 98 科目に増えた。

2) 共同獣医学課程の教育内容

（観点に係る状況）

現在実施している共同獣医学課程の教育内容を示す。

一般教養教育（1 年次）

一般教養教育は，幅広い教養，高い公共性・倫理性を身に付け，時代の変化に合わせて積極的に社会を支え，あるいは社会を改善していく資質を有する人材を養成するための基盤となるものである。このため，北海道大学の高等教育推進機構が提供する幅広い授業科目あるいは，獣医・農畜産の専門職業人を育成する帯広畜産大学が提供する基盤的授業科目を学ぶ。

専門教育（2 年次～5 年次）

この課程は獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠し，かつ国際獣疫事務局(OIE)などのカリキュラムも取り込み，国際的に活躍できる獣医師を養成する教育課程である。ここでは基礎獣医学，病態獣医学，応用獣医学，伴侶動物臨床獣医学，産業動物臨床獣医学を学ぶ。また，日本の畜産基地である北海道の強みを活かし，食肉衛生検査所，農業共済組合，家畜保健衛生所等の関連機関での実習を行うとともに，両大学の教育資源を活用して畜産関連分野及び獣医倫理等の獣医関連分野を学ぶ。

アドバンスト教育（5 年次～6 年次）

この教育課程は 6 つのコースから構成されている（後述）。各コースは，学生が興味を持った分野の専門的知識や技術をさらに深く修得するためのものである。6 年次は獣医師養成の最終年でもあることから，それぞれのコースは学生の卒業後の進路を想定した到達目標をもち，大学教育と社会との連結を図るものである。

（2）教育の方法

1) 学生や社会からの要請への対応

（観点に係る状況）

平成 23 年度から，獣医学へのモチベーションと獣医学生としての自覚を高揚させるため，1 年次及び 2 年次の夏休みに集中授業を実施している（資料 8）。

動物病院における獣医療実習（学生参加型臨床実習）を始める前に（5 年次前期），学

生の知識・技能・態度のレベルを評価する目的で、全国共通の「獣医学共用試験」を行う予定である（別添資料 14）。本試験は平成 28 年度から実施し、この試験で一定基準に達しない場合には、本実習を履修できない。獣医学共用試験は、知識の理解度をコンピュータで問う CBT (Computer Based Testing) と態度・基本的臨床技能を獣医療面接・身体診療により問う OSCE (Objective Structured Clinical Examination) から構成される。参加型臨床実習においては学生が移動し、伴侶動物獣医療実習は北海道大学動物病院で、産業動物獣医療実習は帯広畜産大学動物病院で、両大学の全学生が受講する。動物病院を用いた参加型臨床実習は、いずれも少人数グループの臨床ローテーションで実施する。

なお、北海道大学においては 5 年時学生に共用試験を課すことから、平成 29 年度からの実施となる

多様化する獣医学への社会的ニーズに応えるため、さらに国際的水準の獣医学教育を実施するため、獣医師が関わる分野に対応した実学を学ぶ必要がある。5～6 年次には、学生と社会からの、高度、多様、かつ専門的な要請に応えるアドバンスト教育を行う（資料 9）。アドバンスト科目は、「アドバンスト演習」「課題研究」「研究・臨床セミナー」から構成される。後 2 者を受講するため、5 年次から北海道大学の学生は研究室に配属し、帯広畜産大学の学生は担当教員に師事する。

資料 8 獣医学を学ぶモチベーション高揚のための集中授業

科目名	開講期	単位数	開設大学 (実施場所)	授業の概要
帯広基礎獣医学演習	1 年次（総合は 2 年次）・夏休み	2	帯広畜産大学 (帯広市)	各専門分野における学問体系、トピックスを概説する。 6 年間の課程で学ぶ獣医学の全体像を把握する。
農畜産演習	1 年次（総合は 2 年次）・夏休み	2	帯広畜産大学 (帯広市)	農畜産技術の一端を実際に体験し、農畜産への幅広い興味や問題意識を育てる。
札幌基礎獣医学演習	2 年次（総合は 3 年次）・夏休み	2	北海道大学 (札幌市)	各教室・施設等を見学し、研究内容やその意義を理解する。
獣医学概論	2 年次（総合は 3 年次）・夏休み	2	北海道大学 (札幌市)	各分野の獣医師が、業務内容、社会的役割・責任、課題などを紹介する。獣医学を学ぶ意欲を高め、広い視野をもって学ぶ必要性を理解する。

出典：教務担当データ

資料 9 アドバンスト科目の概要

コース名	関連教室・専門分野	概要
基礎獣医学アドバンスト	解剖学, 生理学, 生化学, 薬理学	生命科学研究あるいはバイオメディカル分野に働く獣医師にとって重要な技能・技術を身につけ、動物の特性や薬物応答を正確に読み取る力を養うことを目標とする。
病態獣医学	病理学, 微生物学, 伝染	動物の感染症や感染に対する生体応答について最新

アドバンス ト	病学, 寄生虫学	の知識や有用な検査・診断技術を身につけ, 臨床分野や公衆衛生分野に限らずバイオメディカル分野や野生動物の保全等に於いても, その技能を応用する力を養うことを目標とする。
応用獣医学 アドバンス ト	野生動物学, 実験動物学, 放射線学	遺伝子操作による新たな実験動物の作出や実験動物愛護・福祉の観点から適正な飼育管理法を学び, 希少野生動物の遺伝子保存や野生動物の感染症や化学物質による汚染等に関連する最新の知識や検査・診断技術を修得することを目標とする。
公衆衛生学 アドバンス ト	獣医公衆衛生学, 環境毒 性学, 家畜衛生学, 疫学	公衆衛生分野にとって重要な検査技術を身につけ, 食品衛生監視・指導法や検疫業務に関する最新の知識や事例を学ぶことで, 人の健康に密接にかかわる食品の安全性の確保や生活環境の保全に寄与する力を養うことを目標とする。
伴侶動物臨 床獣医学ア ドバンスト	内科学, 外科学, 画像診 断学, 臨床検査学	小動物臨床分野において重要な検査や診断技術を身につけ, 疾病の特徴を理解し適正な検査や治療を行うことを目標とする。
産業動物臨 床獣医学ア ドバンスト	内科学, 外科学, 繁殖・ 産科学, 臨床検査学	大動物臨床分野に必要な検査や診断技術を身につけ, 産業動物の疾病の予防や伝染病発生時の対処法を学び, 適正な検査や治療法を学ぶ。さらに衛生管理の指導などを介して食の安全を担保する力を養うことを目標とする。

出典：教務担当データ

2) 授業の創意工夫

(観点に係る状況)

相互提供科目の総て, ならびに共通科目の一部については, クォーター制(年4学期制)を導入した。授業に関する情報を迅速かつ適確に提供するため, また授業資料や自学自習教材へのアクセスを容易にするために, 共同獣医学課程ポータルシステム(VetPortal)を導入した(別添資料15)。

共同獣医学課程においては, face-to-face の授業を原則とする。ただし, 畜産系科目ならびに外部講師の多い授業科目については双方向遠隔授業システムを導入し講義・演習を実施している(資料10)。

資料10 双方向遠隔授業システムを用いる科目

科目名	開講時期	単位数	開設大学
家畜育種学	3年次・1-Ⅱ期	2	帯広畜産大学
食品栄養学	4年次・1期	1	帯広畜産大学
草地飼料学	4年次・1-Ⅱ期	2	帯広畜産大学
家畜管理学	4年次・Ⅲ-Ⅳ期	2	帯広畜産大学
応用内科学	4年次・Ⅳ期	1	北海道大学
獣医法規	5年次・Ⅰ期	1	北海道大学
獣医倫理	5年次・Ⅰ期	1	北海道大学
動物福祉学	5年次・Ⅰ期	1	北海道大学

出典：教務担当データ

3) 学生の主体的学習を促す取り組み

(観点に係る状況)

- ①パソコン 45 台を設置した e-ラーニング教育システム室を整備し、24 時間開放している。それに加え、獣医学部図書閲覧室 (24 時間開放)、情報演習室 (平日 7:00 ~ 21:30) も開放している。
- ②自学自習システム Glexa を導入し、セルフラーニングシステム、バーチャルスライドシステム、術野映像システムを搭載した (別添資料 6)。セルフラーニングシステムには 21 のコンテンツが含まれ、モデル・コア・カリキュラムに則った授業資料ならびにテスト形式の自学自習を実施できる。バーチャルスライドシステムは組織学の標本情報が記録されており、日本獣医解剖学会の支援によってさらに標本拡充の取組を行っている。
- ③平成 22 年度～平成 23 年度は「基礎獣医学演習 II」において、平成 24 年度～平成 25 年度では「生物科学基礎演習」において、問題解決型 (PBL)・チュートリル授業を継続している。
- ④オープンキャンパスにおいて、大学院生、学部学生を短期支援員として雇用し、「自由参加プログラム」では一部に学生主体の進行体制を取り入れ、学生が受付、誘導、司会進行、研究室紹介のプレゼンテーション等、プログラム運営に参加している。また、「高校生限定プログラム」では体験実習を指導している。

4) 国際性の涵養

(観点に係る状況)

- ①平成 22 年度～平成 23 年度入学者は「獣医学英語演習」で、平成 24～25 年度入学者は「生物科学基礎演習」で、いずれも 3 年後期～4 年後期に研究室英語セミナーに参加し、科学論文の読み方、英語による専門用語の知識を学んでいる。
- ②平成 23 年度から大学院博士課程教育リーディングプログラム「One Health に貢献する獣医科学グローバルリーダー育成プログラム」を実施している (研究科の自己点検評価資料を参照)。本プログラムでは授業の半分以上を英語で実施するとともに、海外の研究者との交流を行っている。それに伴い、学部生も必然的に英語に接する機会が急速に増加した。
- ③北海道大学では大学のグローバル化を目指し、平成 25 年度から「新渡戸カレッジ」制度を実施している。カレッジの入学試験に合格し、それに参画する獣医学部学生は平成 25 年度入学者で 5 名である。
- ④英国エジンバラ大学獣医校 (RDSVS: The Royal (Dick) School of Veterinary Studies) との交流は、平成 21 年度の部局間交流協定に基づいて実施されている。実施の実績を資料 11 に示す。なお、平成 26 年度からはタイ王国カセサート大学との単位互換を伴う学生交流を実施している (評価期間外)。

資料 11 エジンバラ大学との交流

年度	受入大学	人数(教員/学生)	内容
平成 21 年度	北海道大学	2/9	知床国立公園での野生動物研修, 十勝・日高地方の大動物臨床研修, 旭山動物園
平成 22 年度	RDSVS	2/10	エジンバラ大学, グラスゴー大学での小動物, 大動物臨床研修
平成 23 年度	東日本大震災のため中止		
平成 24 年度	北海道大学	1/2	標茶町, 羅臼町での野生動物研修
平成 25 年度	RDSVS	2/9	エジンバラ大学, グラスゴー大学での小動物, 大動物臨床研修

出典：教務担当データ

5) 成績評価と GPA/進級・卒業要件

(観点に係る状況)

平成 22 年度入学者においては、資料 12 の進級要件・卒業要件を付している。平成 23 年度入学者においては、資料 13 の進級要件・卒業要件を付している。平成 24 年度～平成 25 年度入学者においては、資料 14 の進級要件・卒業要件を付している。

各科目の評価は、原則として「秀、優、良、可、不可」の 5 段階で行われ、GP (Grade Point) で示されている。北海道大学では、平成 21 年度から既に GP の単位あたりの平均値を算出した GPA 制度を導入している。共同獣医学課程の実施にともない、帯広畜産大学でも平成 24 年度入学者から GPA 制度を導入した。平成 22 年度～平成 23 年度学部入試入学者については、卒業判定には GPA 評価を用いていないが、3 年次、ならびに 5 年次の進級判定で GP を利用し、進級に係る所定の単位のうち、専門科目 1 科目（実習を除く）に係る単位のみ修得していない者の評価ポイント（秀 4.0、優 3.0、良 2.0、可 1.0 で算出）が 1.6 以上の場合には審議の上、進級を認めている。平成 23 年度から実施された総合入試において、獣医学部進学希望者 5 名の選抜には GP を利用したポイントが用いられている。平成 24 年度～平成 25 年度において、獣医学部に進学した学生の GPA を資料 15 に示す。

資料 12 平成 22 年度入学者における進級・卒業要件（単位数）*

	3 年次進級	5 年次進級	卒 業
全学教育科目	46	46	48
専門科目・必修	31	105	139
専門科目・選択	-	-	10
合 計	77	151	197

*これにかかわらず、進級に係る所定の単位のうち、専門科目 1 科目（実習を除く）に係る単位のみ未修得者については、教授会の議を経て、進級させることがある。

出典：教務担当データ

資料 13 平成 23 年度入学者における進級・卒業要件（単位数）*

	2 年次進級	3 年次進級	5 年次進級	卒 業
全学教育科目	32	46	46	46
専門科目・必修	－	31	105	139
専門科目・選択	－	－	－	10
合 計	32	77	151	195

*これにかかわらず、進級に係る所定の単位のうち、専門科目 1 科目（実習を除く）に係る単位のみの未修得者については、教授会の議を経て、進級させることがある。

出典：教務担当データ

資料 14 平成 24～25 年度入学者における進級・卒業要件（単位数）*

	2 年進級	4 年進級	5 年進級	卒 業
一般教養科目	32	46	46	46
専門科目・必修	－	79	121	136
専門科目・選択	－	－	－	4
アドバンスト科目	－	－	－	14
合 計	32	125	157	200

*これにかかわらず、進級に係る所定の単位のうち、専門科目 2 科目（実習を除く）に係る単位のみの未修得者については、教授会の議を経て、進級させることがある。

出典：教務担当データ

資料 15 獣医学部に進学した総合入試（理系）による入学者の GPA

年 度	最低～最高 GPA (平均)	理系総合入試内での 順位 (最低～最高)	理系総合入試学生の 平均 GPA	進学可能な理系 総合入試学生数
平成 24 年度	3.40～3.87 (3.71)	2～30	2.54	1087
平成 25 年度	3.63～3.88 (3.71)	9～62	2.72	1070

出典：教務担当データ

6) 研究室配属

（観点に係る状況）

平成 22 年度～平成 23 年度入学者は、「卒業論文」「獣医学総合演習」「獣医学総合実習」の単位取得のため、学生は各教室 3 名を上限として配属される。配属は、原則として成績順である。資料 16 に平成 22 年度～平成 25 年度における各教室配属学生数を示す。

平成 24 年度～平成 25 年度入学者は、5 年次以降にアドバンスト科目「課題研究」及び「研究・臨床セミナー」を実施するため、各教室 3 名を上限として配属される。なお、5 年次以降卒業までの学修を帯広畜産大学で実施することができる（4 名以内）（別添資料 16）。帯広畜産大学の学生においても同様である。

資料 16 平成 22～25 年度の教室配属学生数（当該年度に 5 年次進級した学生数）

教室名	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
解剖学	2	2	2	2
生理学	3	3	2	3
生化学	3	2	1	1
薬理学	0	3	1	1
微生物学	3	3	3	2
感染症学	3	2	3	3
寄生虫学	1	1	2	2
実験動物学	1	0	1	1
獣医内科学	3	3	3	3
獣医外科学	3	3	3	3
比較病理学	3	3	3	3
繁殖学	3	2	3	3
臨床分子生物学	3	3	2	3
先端獣医療学	0	1	0	0
公衆衛生学	3	2	3	2
放射線学	1	3	3	2
毒性学	3	3	2	3
野生動物学	3	2	2	2
獣医衛生学	2	3	2	0

出典：教務担当データ

7) 資格の付与

（観点に係る状況）

平成 22 年度～平成 23 年度入学者に対して、北海道大学総長名で学士（獣医学）の学位を授与する。平成 24 年度以降入学者に対しては、獣医学部共同獣医学課程を卒業した者には、北海道大学総長及び帯広畜産大学学長の連名で学士（獣医学）の学位を授与する。授与日は例年 3 月 10 日前後である。（ただし学位記授与式は 3 月 25 日頃実施される。）

別添資料 17 に平成 20 年度（第 60 回）から平成 25 年度（第 65 回）の獣医師国家試験の大学別情報を示す（農林水産省まとめ）。

【観点ごとの分析】

教育課程の編成においては、平成 23 年度の総合教育部の設置ならびに平成 24 年度の北大・帯畜大共同獣医学課程開始に伴い、専門科目実行教育課程表（卒業単位数、科目数、科目開講期、シラバス）を大きく変更した。平成 22 年度に比較し、卒業単位数は 3 単位増（平成 23 年度に比し 5 単位増）、科目数は 33 科目増である。科目開講期にはクォーター制を導入し、シラバスの北大-帯畜大間での統一を実現している。

教育の方法では、モチベーション高揚のための集中授業、臨床技能保証のための共用試験、国際的通用性を高める参加型臨床実習の導入、社会ニーズを見据えたコース制授

業を導入し、多様な獣医学の社会的使命に応える教育改革を実現している。

さらにポータルシステム、双方向遠隔授業システム、自学自習環境の整備、海外交流など、教育方法の改善を実現している。総合入試入学者で獣医学部に進学する学生のGPAは極めて高い状態で推移している。

教室配属について、平成22年度～平成25年度は大きな混乱や偏りなく、配属がなされており、その間の国家試験合格率も国内で最も高かった。平成24年度以降の入学者が教室に配属される際は、帯広畜産大学に籍をおく学生も北海道大学を希望すれば移動することが可能とし、その具体的な工程表がすでに作成されている。

資料5ならびに別添資料17によると、留年する学生は非常に少なく、また国家試験の合格率は高い水準を維持している。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

専門教育はバランスよく編成され、獣医学の国際水準を見据え、可能な限り大きく教育改革を実行していると判断される。教育方法として、集中授業、自学自習、社会的使命に応える改革が認められる。特に共同獣医学課程を実施し、国際通用性確保のための教育改善強化が伺える。大学を越えた学生移動の実現は画期的であると判断される。以上の、分析から期待される水準を大きく上回ると判断する。

(改善方策)

教育課程の編成は社会的ニーズや学生の期待に応える形で、継続的な見直しが必要である。通常、実行教育課程表が見直され、次期見直しまでは卒業生の動向を見る必要があるが、国際的通用性を意識した場合、社会の変動とともに臨機応変で開講期やシラバスを変更していくことを希望する。

5. <観点>学生支援

(1) 学生へのガイダンス

(観点到に係る状況)

入学直後に新入生オリエンテーション及び総合教育部ガイダンス(学部学科等移行ガイダンス、学部ガイダンス)が実施される。1年次には6月、9月、2月にクラスアワーが設定されている。同一の科目を3回連続で休んだ場合、自動的にクラス担任へ連絡が入る。平成23年度から実施の全学教育科目について、1年次は総合教育部に学籍をおくため、原則として専門教育を実施できない。しかし、「農畜産演習」「帯広基礎獣医学演習」に関しては、特別に夏期休暇中に開講している。これには1年クラス担任が引率し、帯広畜産大学の1年クラス担任に引き渡している。2年次においては、総合教育部より進学した5名を含めた履修指導をクラス担任が再度実施している。

平成23年度以前の入学者への情報伝達は、主として掲示板で行っている。平成24年

度以降の共同獣医学課程学生には VetPortal システムを利用した情報公開をインターネット上でリアルタイムに行っており、学生は講義資料情報、休講情報、試験情報、時間割情報などを入手している。

トピックとして、獣医学部同窓会では総会後に獣医学フォーラムを開催し、卒業生が社会人として大学ならびに現役大学生に求める事柄を中心に講演を行っている（資料 17）。

資料 17 獣医学部同窓会フォーラム

年 度	テーマ
平成 22 年度	北大獣医学部の将来を考える-同窓会会員の想いと現役学生の思い-
平成 23 年度	獣医学の将来を考える -活躍する女性獣医師とその卵たち-
平成 24 年度	新動物病院に期待するもの
平成 25 年度	獣医学教育改革への取り組み
平成 26 年度	未来のフロンティア・ベッツ -現役学生が語る将来の夢-

出典：北海道大学獣医学部同窓会報

（２）留学生の指導

（観点に係る状況）

留学生については日本人と同様、4年次まではクラス担任が、5年次以降は配属された教室の教員が指導にあたる。また、留学生担当の職員を配置し、国際交流委員（留学生担当教員）も指導に当たっている。学部所属の留学生は、入学後最大2年間チューターと呼ばれる学生が日々の生活を補助し、授業の予復習や日本語指導の手助けを行っている。なお、留学生の日本語指導に関しては、希望学生は国際本部での日本語授業も受講することができる。

（３）経済的支援

（観点に係る状況）

平成 22 年度～平成 25 年度においては、獣医学部創立 50 周年基金群海外派遣事業で海外での学会発表等旅費の一部を支援している（別添資料 18）。また、TOEFL-iBT 試験奨学金を支給している。なお、これら事業は、平成 26 年度以降はフロンティア基金ならびに 25 周年学術交流基金群と併せ、北海道大学獣医学学術交流基金と 1 本化する。

エジンバラ大学との短期学生交流支援のため、本学国際本部で行う「海外教育交流支援事業」に採択され、支援を受けている。

（４）表彰制度

（観点に係る状況）

「北海道大学新渡戸賞」は、優秀な学生の育成のため、平成 17 年に設けられた。「北海道大学鈴木章科学奨励賞－自然科学実験－」は、本学の全学教育科目「自然科学実験」において、特に優秀な成績を修め、かつ、本学の目指す全人教育の理念にふさわしい学生を表彰するため、平成 23 年に設けられた。また、課外活動を対象とする「北大えるむ賞」、「北大ペンハロー賞」、英語の成績優秀者を対象とする「北海道大学レーン記念

賞」がある。さらに、財団法人北海道大学クラーク記念財団により本学の学部の学業成績優秀学生を対象とする「クラーク賞」が設けられている。他に、優秀な大学院生を表彰する制度として「大塚賞」がある。

獣医学部独自の表彰制度として、「日本獣医師会長賞」「北海道獣医師会長賞」を授与している。

【観点ごとの分析】

学生へのガイダンスでは、総合教育部においては入学時のガイダンスやクラス担任の配置等、手厚いサポートシステムが整備されている。獣医学部においては1年次に担当したクラス担任が4年次まで修学指導にあたっている。その後、5年次クラス担任は正就職委員として、6年次クラス担任は副就職委員として進路指導を行い、獣医学部独自で官公庁合同就職説明会を実施している。2年次進学に伴い、総合入試入学者からの学生を含めた修学指導を再度実施することで、学部別入試入学者も新鮮な気持ちで専門教育に移行している。

留学生の指導では、私費外国人留学生入学者は1名（韓国）で、入学時より日本語も堪能であることから、日本人学生と区別なく履修指導している。短期留学生には、英語による講義、実習を実施している。短期留学生は前記組織で十分な指導を行っている。

経済的支援では、平成22年度～平成25年度において、50周年基金群海外派遣事業で7名の大学院学生に支援したが、学部学生は1名であった。TOEFL-iBT試験奨学金は3名の学部学生に支援した。

平成22年度～平成25年度において、「日本獣医師会長賞」「北海道獣医師会長賞」及び「クラーク賞」を毎年授与している。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

学生へのガイダンスについて、留年する学生の非常に少ない点ならびに国家試験合格率の高い点は履修指導が徹底された結果と判断される。留学生指導について、エジンバラ大学との交流が期待以上に発展していることを受け、平成26年度からタイ国カセサート大学との単位互換を伴う交流を実質的に開始した。さらに、モンゴル農業大学との教育交流を平成26年度より実質的に開始した。経済的支援として、学内の競争的資金である「海外教育交流支援事業」の経費を恒常的に獲得し、国際交流の支援をしてきた。以上の分析から、期待される水準を大きく上回ると判断する。

（改善方策）

国際的な教育交流が益々盛んにあることが予想されることより、より多くの支援経費を獲得するための強化策を検討する。

6. <観点>教育の成果

(1) 履修・修了の状況

(観点に係る状況)

入学者数, 収容者数については資料4に, 在籍期間の推移については資料5に示した。

(2) 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

平成22年度～平成25年度における就職状況を資料18に示した。

資料18 平成22年度～平成25年度における就職状況

就職先	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
地方公務員	北海道、京都市、名古屋市	北海道(2)、東京、三重県、鹿児島県、札幌市、大阪市、岡山市	北海道(2)、福島県、栃木県、千葉県、愛知県、徳島県、宮崎県、小樽市、墨田区、広島市	北海道、高知県、三重県、札幌市、下関市、札幌医科大学
国家公務員	農水省(3)	農水省	農水省(2)、環境省	農水省
企業・団体・研究機関	公衆衛生研究所、化血研、阪大微生物病研究会、理研、旭化成、大日本住友製薬、明治製菓ファルマ、武田製薬、全農、家畜改良センター、動物園	京都大学霊長類研究所、日本食品分析センター(2)、アステラス製薬、興和、食環境衛生研究所、バーレージャパン、アマゾンジャパン、ライティングカンパニーあかり組、ARTレディスクリニック、油化産業	全農、日高軽種場農業協同組合、大塚製薬、タカラバイオ、ヤクルト、武田製薬、日本たばこ産業、日本水産	全農、農業・食品産業技術総合研究機構、東武動物公園、共立製薬、帝人、アマネセル、浜松ファーマリサーチ、大正製薬、マルホ、日本チャンキー
大動物臨床	山形県 NOSAI、北海道 NOSAI、JRA	全国農協連合会、上川北 NOSAI、オホーツク NOSAI、後志 NOSAI、日本中央競馬会(2)	北海道 NOSAI(2)、JRA	北海道 NOSAI、大和高原動物診療所
小動物臨床	兵庫(3)、北海道(2)、東京(2)、愛知(2)、大阪(2)、千葉、三重	北海道(2)、埼玉県(2)、茨城県、大阪府、京都府	北海道(3)、埼玉県、神奈川県、東京都、千葉県、愛知県(2)、熊本県	北海道(2)、埼玉県(3)、神奈川県、東京都、京都府(2)、愛知県、兵庫県、香川県
進学	北大(5)、国内他大学	北大(8)、他大学(2)	北大(4)、国内他大学	北大(7)、国内他大学
その他	研究員、未定(2)	青年海外協力隊	就職活動中、未定	青年海外協力隊、未定

() 内は人数を示す。

出典：教務担当データ, 北海道大学獣医学部同窓会報

(3) 国家試験の合格状況

(観点に係る状況)

農林水産省が公表する平成20年度(第60回)から平成25年度(第65回)の獣医師国家試験の大学別合格状況を別添資料17に示した。

(4) 学修に対する学生の評価

(観点に係る状況)

北海道大学では、学生による授業評価を全学的に統一した内容で実施している。その結果は、科目責任教員にフィードバックされ授業の改善に利用されている。その授業評価の結果を部局別に集計した「総合評価（平成 18 年度～平成 23 年度）」を別添資料 19 に示した。さらに、平成 24 年度より実施した共同獣医学課程夏期集中授業の学生アンケート結果を別添資料 20 に示した。

(5) 学生が身につけた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

入学者数・収容者数は資料 4 に、在籍期間の推移については資料 5 に示した。また、全学教育での獣医学生の GPA ならびに TOEFL-ITP 平均を資料 19 に示した。さらに国家試験合格率を別添資料 17 に示した。これらから、獣医学生が全学的ならびに全国的に高いレベルを維持していることが判る。

資料 19 獣医学部生（1 年次）の全学教育の GPA 平均値と TOEFL-ITP の平均値

年 度	全学教育の GPA 平均値		TOEFL-ITP の平均値	
	獣医学部平均	全学部平均	獣医学部平均	全学部平均
平成 25 年度	2.62(1 学期)	2.51(1 学期)	519.97	481.19
	2.58(2 学期)	2.53(2 学期)		

出典：教務担当データ

(6) 教育成果に対する社会の評価

(観点に係る状況)

平成 24 年度の合同就職説明会の際、団体に対しアンケートを実施した(別添資料 21)。集計の結果、都道府県において慢性的に獣医師が不足している中、本学卒業生に限らず即戦力と問題解決能力が求められている。具体的には、公衆衛生行政への対応が求められていることが明らかとなった。

【観点ごとの分析】

履修・修了の状況では、留年する学生は非常に少なく、在籍年数は 6.02～6.16 であった。進路・就職の状況では、平成 22 年度～平成 25 年度にかけて、ほぼ 100%の就職率（平成 24 年度のみ 97.2%）である。職域の比率は、公務員が約 1/4、企業が約 1/4、臨床が約 1/3、進学が約 1/5 で、バランスよくニーズのある職域に就職している（全体 168 名に対して公務員 36 名、企業 40 名、臨床 55 名、進学 29 名）。大動物臨床に就職する学生が少ないのは全国的な傾向である。大学院等への進学者が多いのは本学の大きな特徴である。国家試験の合格状況では、平成 22 年度～平成 25 年度において、本学では 93.2～100%の合格率で、高いレベルを維持している。

学修に対する学生の評価では、学生アンケートの結果、獣医学部生の評価は他学部と比較して平均以上を維持している。共同課程夏期集中授業のアンケートを集計すると、

開始した平成 24 年度では学生から多くの不満が聞かれたが、平成 25 年度以降には不満が激減し、改善の大きな効果が見られた

学生が身につけた学力や資質・能力では、留年する学生が非常に少ない点、国家試験の合格率の高い点、ならびにほぼ 100%の就職率である点から、十分な学力ならびに獣医学の能力を身につけたと判断される。さらに、職場アンケートから、教育成果に対する社会の評価として、本学に限らず即戦力と問題解決能力が求められている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

留年する学生が少なく、国家試験の合格率が高く、100%の就職率を維持していることから、期待される水準を上回ると判断される。

(改善方策)

職場アンケートにあるように、即戦力、問題解決能力のさらなる教授が必要である。

7. <観点>教育の質の向上ならびに改善のための取り組み

(1) 教育改善のための検討・実施体制

(観点到に係る状況)

獣医学部では教務委員会の中に学部教育ワーキンググループと大学教育ワーキンググループを設置している。さらに、共同獣医学協議会の中に共同教務委員会を設置し、学部教育ワーキンググループと連携して教育改善のための検討・実施に取り組んでいる。さらに、学部長直轄の臨床カリキュラム検討ワーキンググループでは、EAEVE 国際認証に向けて、ポリクリ時間の確保等の短期的教育改善の他、学生移動と教員移動を効率化する長期的教育改善のあり方について検討している。

(2) ファカルティー・ディベロップメント (FD) の状況

(観点到に係る状況)

平成 22 年度～平成 25 年度に実施した研究科・学部内ファカルティー・ディベロップメント (FD) の状況を別添資料 22 に示す。獣医学部では FD 委員会を、共同獣医学協議会では北大、帯畜大両校の教員の共同 FD をそれぞれ設置し、各々独自の研修を実施している。共同 FD は平成 23 年度から実施され、交互に両大学が主宰となり原則として 1 泊 2 日で実施している (別添資料 23)。

(3) 授業評価の実施状況

(観点到に係る状況)

学生アンケートの結果を別添資料 19、ならびに別添資料 20 に示す。

【観点ごとの分析】

教育改善のための検討・実施体制は、学部教育ワーキンググループと共同課程教務ワーキンググループとが有機的に連携し、かつ獣医学教育改革室ならびに国際獣医学支援室を加え、多角的な方面から改善が検討・実施されている。ファカルティー・ディベロップメントの状況では、研究科・学部FDだけではなく、帯広畜産大学との共同FDを定期的実施し、活発な教育改善の議論を行い、授業等に反映させている。授業評価の実施状況は、全学アンケートのほか、共同課程では帯広畜産大学と共通のアンケート用紙を作成し実施している。共同課程実施の平成24年度に比べ平成25年度では大きく改善されている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

教育改善に係るワーキンググループ、支援室、そして各教室の活発な活動が伺える。FDを活発に実施し、学生アンケートの分析から確実に教育改善につなげる努力が伺える。以上のことから、期待される水準を上回ると判断される。

(改善方策)

共同FDは1年に1回を実施しているが、より緊密な連携を図るため年2回の実施が可能であるか検討する。

8. <観点>教育活動（教育組織以外）

(1) 教育活動の実施状況（教育組織以外）

(観点到に係る状況)

教育組織以外での教育活動として、各分野・教室が独自に行っているセミナー、所属する学部学生の学会発表、ならびに学術雑誌への公表について調査した結果を別添資料24に示す。

【観点ごとの分析】

教育組織外での多様かつ活発な教育・研究活動が実施され、学部学生だけでなく大学院生と共に学ぶ機会を数多く提供されている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

教育組織以外でも、幅広い内容の教育・研究活動が数多く実施されていることから、

期待を上回ると判断される。

(改善方策)

教育組織以外においても、自学自習の機会を多くするため、共有のサーバー等の活用が期待される。

9. <観点>オープンキャンパスの実施状況

(1) オープンキャンパスの実施状況

(観点に係る状況)

オープンキャンパスは毎年7月末～8月上旬に開催しており、1日目(土曜日)は事前予約した高校生のみが参加できる「高校生限定プログラム」、2日目(日曜日)は予約なしで受験者に限らず保護者の方等も参加できる「自由参加プログラム」を実施している。

1日目の高校生限定プログラムは、例年多くの参加希望者(別添資料 25)がいるため抽選で参加者を決定している。午前中は基礎系教室によるコース別体験学習、午後は臨床系教室の見学及び体験実習を行っている。基礎系教室によるコース別体験学習では、高校生を4グループ(平成24年度までは3グループ)に分けて各担当教員が引率し、学内施設見学、研究室訪問、実験体験等を行っている。臨床系教室の見学及び体験実習では、高校生を6グループに分けて、各教室の担当教員及び学部学生、大学院生により模型を使った手術体験、牛の診療体験、病院見学等を行っている。

2日目の自由参加プログラムは学部学生が主体的に運営しており、学生による司会進行のもと、学部長による学部紹介、各教室に配属されている学生による各教室の研究内容、日常生活、受験勉強のアドバイス等のプレゼンテーションを行う。またプログラム終了後、学部学生との個別相談会を実施し、来場者が自由に在学生へ質問することができる時間を設けている。

【観点ごとの分析】

1日目の「高校生限定プログラム」では、平成22年度～平成23年度は定員を45名としていたが、希望者が多かったため、平成24年度以降は定員を60名として運営している。2日目の「自由参加プログラム」では、平成22年度～平成23年度は合計400名の参加者であったが、平成24年度～平成25年度は500名を超えた。ここには示さないが、終了後のアンケートにおいても例年好意的な感想を多数いただいている。平成24年度以降の両プログラムで希望者が急増した原因として、学部学生がプログラムの運営に直接参加する形式をとった点が大きい。つまり、学部学生にとって分かりやすい説明の仕方を身につける貴重な機会となっているだけでなく、参加する受験生や保護者等が本学部を身近に感じるこのことのできる運営形式といえる。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

平成 22 年度～平成 25 年度を通じて、オープンキャンパスへの参加者が増加しているとともに、運営する側として積極的に学部学生が参加することで、訪問する側、迎える側の双方に有益な結果をもたらしている。以上の分析から、期待される水準を大きく上回ると判断される。

(改善方策)

東京、大阪、名古屋ならびに道内など国内における本学説明会は恒例行事として実施されているが、海外への説明は比較的消極的であるかもしれない。本学における獣医学は職業教育であるため非常に難しいと思われるが、学部での留学生確保の目的で海外におけるオープンキャンパスの実施が望まれる。

10. 特筆すべき事項

(1) 共同獣医学課程

平成 24 年度入学者から北海道大学と帯広畜産大学は、国際的水準の獣医学教育を実施するため、共同獣医学課程を編成し、北海道というフィールドを生かした実践的かつ先進的な獣医学教育を行っている（別添資料 2, 3, 4, 13）。

本学部共同獣医学課程では、下記の到達目標を目指して学修する点に特徴を持つ。

- 1) 獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけることができる。
- 2) 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技能を持つことができる。
- 3) 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技能を持つことができる。
- 4) 最先端の生命科学研究に触れ、生命現象の新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を持つことができる。

(2) 4 大学連携補助事業（国立大学改革強化推進補助事業「国立獣医系 4 大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制の構築」）

平成 24 年度から、2 つの共同獣医学教育課程（北大・帯畜大共同教育課程，山口大・鹿児島大共同獣医学部）の連携を強化し、北日本と南日本の地域特性を活かした教育プログラムの開発と相互利用を推進する、「平成 24 年度国立大学改革強化推進事業」を開始している。目標として、欧米の第三者評価機関による評価を指標に人員構成と教育システムを国際水準に充実させ、獣医学教育の国際競争に勝ち得る教育体制を構築するものである。これを礎に日本独自の獣医学教育の質評価システムを構築し、全国獣医系大学の教育水準の底上げを先導することを企図している（別添資料 26）。

(3) エジンバラ大学との交流

英国エジンバラ大学獣医校(RDSVS: The Royal (Dick) School of Veterinary Studies)とは、平成19年度にインターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)が採択され、学生2名を短期ならびに長期派遣した。平成20年度にRDSVS研究科長が北大を訪問し、ITP協定に調印した。平成21年度に部局間交流協定に締結した(別添資料8)。本交流協定では、学部学生のRDSVS派遣ならびにRDSVS学生の北大受入れを毎年交互に実施している(資料11)。これに加えて、平成24年度に連携協定を締結した標津町にRDSVS教員を招き、野生動物に関する道民セミナーを実施するなど、地元住民も交えた国際交流を推進している(別添資料27)。

(4) 大学の世界展開力強化事業

平成25年度、大学の世界展開力強化事業(ASEAN International Mobility for Students Programme(AIMS)との連携)に、本学部を中心として申請したプログラムが文部科学省に採択されている。本プログラムは、北海道大学、東京大学、酪農学園大学、タイ王国カセサート大学、ならびにチュラロンコン大学と、各々の教育資源を活用して単位互換を伴った教育連携体制を築くもので、政府主導の国際的な学部学生交流事業である(別添資料9)。平成25年度には、本格実施に向けた国際委員会を開催し、単位互換の科目、学生交換の方法などを議論し、コンソーシアムを設立している(獣医学研究科 website: <http://cve.vetmed.hokudai.ac.jp/>)。平成26年度には、3ヶ月にわたる学生の相互派遣・受入を行い、本格的な連携教育を開始した。